

2021 年度千年村ゼミ

# 阿仁川流域調査報告書

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科  
中谷礼仁建築史研究室  
千年村研究ゼミ

第1章 調査概要.....	4
1-1.調査の目的.....	4
1-2.地域の選定理由.....	5
1-3.阿仁川流域に関する既往研究.....	6
1-4.調査対象地域の概要.....	8
1-5.調査対象集落について.....	12
1-6.調査行程の記録.....	13
1-7.本報告書の執筆分担.....	15
第2章 本論・各集落について.....	17
2-1.はじめに.....	17
2-2.打当内.....	18
2-3.戸島内.....	24
2-4.比立内.....	29
2-5.笑内.....	36
2-6.根子.....	41
2-7.粕内.....	48
2-8.阿仁合.....	54
2-8.惣内.....	62
2-9.米内沢.....	67
第3章 流域を通じたの考察.....	73
3-1.はじめに.....	74
3-2.集落構造の変化.....	75
3-3.地質・地形・水利・自然災害.....	77
3-4.地域経営（産業・生業）.....	78
3-5.建築的特徴の変化.....	81
4.結論.....	85
5.図版出典.....	86

# 1.調査概要

1-1 調査の目的

1-2.地域の選定理由

1-3.先行研究

1-4.地域の概要

1-5.調査対象集落について

1-6.調査行程の記録

# 第1章 調査概要

## 1-1.調査の目的

### ① 東北地方における長期持続集落の発見手法の確立

中谷研究室千年村研究ゼミでは、これまで古代の地名辞典である『和名類聚抄』に記載されている古代郷の比定地を〈千年村〉候補地とし、集落の開発史とそれらがもたらした現在の集落構造・持続性について調査を続けてきた。<sup>1</sup>さらに昨年度は荘園に注目し、古代から中世にかけて土地の開発史や集落立地の展開について研究を行った。その活動の一環として、荘園地が比定された現在の場所を地図へプロットした「荘園プロット」<sup>2</sup>を作成した。これによって、古代郷や荘園地の立地傾向を、面的・空間的に捉えることが可能となった。

しかし、比較的両者のプロットが少ない東北地方では、その傾向をつかむことが未だ困難である。これは『和名類聚抄』が古代律令制における行政区画を示したものであり、現在の東北地方は古代の中央政権の支配が及ばなかった地域が大半であることが理由としてあげられる。

よって本研究では〈千年村〉候補地が少ない東北において、長期持続集落を発見することは可能であろうかという問いを発端に、調査対象地である阿仁川流域において、主体を変えながらも集落が持続してきたことを示し、その要因を明らかにすることを目的とする。

### ② 水系を単位とした調査手法

〈千年村研究〉では大字を単位に生活圏を捉え、調査を行ってきた。

しかしアイヌ語地名プロット<sup>3</sup>の分析によって、東北のアイヌ語地名は川に沿って山間部から下流に向かって分布しているものが多いことがわかった。アイヌ語で川を意味する「ベツ(ベツ)」や沢を意味する「ナイ」が東北の地名に多いことは、先行研究<sup>4</sup>によって指摘されており、アイヌ語地名と川は切っても切れない関係性にあるこのことから、東北アイヌ語地名の集落は水系に沿って交通・生産などの繋がりがあがる可能性が高いと考えた。

よって、本調査では、大字を越えた流域という単位を利用し、水源に近い山間部から下流までの一帯を調査する手法をとることで、水系に沿った連続性や地形の変化に伴う集落構造の変化を明らかにすることを目的とする。

---

<sup>1</sup> 中谷 礼仁、庄子 幸佑、鈴木 明世「平安期文献『和名類聚抄』の記載郷名の比定地研究を用いた〈千年村〉候補地の抽出方法と立地特性に関する研究」等を参照

<sup>2</sup> 荻野智樹「荘園地プロットの方法に関する研究」を参照

<sup>3</sup> 東北アイヌ語地名プロットについては東野友紀「『和名類聚抄』批判に基づく東北における長期持続集落の発見手法」を参照

<sup>4</sup> 金田一京助「奥州蝦夷種族考」工藤雅樹編『金田一京助の世界 2 古代蝦夷とアイヌ』（平凡社、2004年）、山田秀三『東北・アイヌ語地名の研究』（草風館、1993年）等を参照

## 1-2.地域の選定理由

以下の理由から、秋田県北秋田市阿仁川流域を調査対象地として選定する。

- ・東北アイヌ語地名プロットが1水系に沿って、まとまって分布しているため
- ・マタギ、鉱業、林業など、複数の生業形態が見られる地域であるため
- ・建築学の既往研究は少ないものの、文献史学、民俗学など複数分野に渡って既往研究が成されている地域であるため
- ・流域の範囲が数日での調査に適しているため

### 1-3.阿仁川流域に関する既往研究

阿仁流域は鉱山、林業、マタギなど、特徴的な産業形態が多く見られたため、民俗学や文献史学などの観点からの研究が特に豊富な地域である。本項では阿仁川流域に関する既往研究について、以下簡潔にまとめる。

#### ●地名研究

■山田秀三「阿仁のナイ地図」『東北・アイヌ語地名の研究』第2編第4章(草風館、1993)

前章でプロットの参照元の文献として挙げた山田秀三『東北・アイヌ語地名の研究』の中でも、阿仁地域に関して1章が割かれている。東北は「ナイ」すなわち「内」の付く地名が多いこと、さらにその分布が山間部に多いことが述べられている。中でもナイ地名が濃密に分布する阿仁地域に関して、現地調査を踏まえたアイヌ語地名の考察が行われている。

#### ●農村研究

■渡部圭一他「阿仁川上流域における村社会と耕地管理― 秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻―」(筑大農林社会経済研究第31号、2015)

阿仁川流域の集落である荒瀬地区にある旧肝煎家にて発見された古文書の解析を通して、近世中期～後期の阿仁川上流域の農村経営に関する分析が行われている。

#### ●鉱山・鉱業について

■阿仁町史編さん委員会『鉱山と異人たち』(阿仁町史編さん室、1989)

お雇外国人の鉱山技師として従事したメッケルら4人のドイツ人技師達の手紙や鉱山関係施設の写真など、当時の史料が阿仁町史編さん委員会によって整理されたもの。写真資料などによって、当時の鉱山周辺の様子を確認することができる。

■弘前大学付属図書館「阿仁鉱山関係絵図ビューア」(<http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/collection/rare/viewer/anikouzan01.html>)

同HPでは「阿仁鉱山一ノ又山全図」「阿仁鉱山二ノ又山鋪図」「阿仁鉱山一ノ又山鋪図」「阿仁鉱山一ノ又山境図」「阿仁銀山町絵図」の5枚の阿仁鉱山に関する絵図が公開されており、近世、近代の鉱山とその周辺の町の様子を見ることができる貴重な資料となっている。これらの絵図は、1965年に弘前大学が旧文学部改組の際に交付された機関研究の経費によって購入した書籍の一部であり、東京の古書店からの購入であることが確認されている。

#### ●林業について

■岩崎直人「秋田に於けるスギ林成立の史的考察」(林学会雑誌第十一巻第五号、1929)  
阿仁川流域はスギ材が有名な特産物であったが、その産出元となるスギ林の実態が中世から近世にかけてどのように変化していったかについて、文献史学を元に整理されている。建材利用、鉾山の燃料としての炭木、焼畑など、各時代で様々な産業形態との関わりからスギ林の変遷が見られる。また、昭和初期の論文ではあるが、その当時の阿仁地域の森林の様子についても随所に記載が見られ、その点では貴重な資料となり得る。

■芳賀和樹「近世阿仁銅山炭木山の森林経営計画-天保14年炭番山繰を中心に-」(林業経済 2011年64巻7号)

近世の鉾山周辺の森林資源の利用と管理に関する論考。阿仁に限らず近世の森林資源利用は、都市向けの建材・薪炭、鉾山向けの材木・薪炭の2つの側面があり、同論は後者に着目している。阿仁地域では鉾山と林業の関係性に着目した研究は多くあるものの、後者に着目した研究は少なく、その点で新規性のある論考である。天保14年炭番山繰などの史料を元に、森林資源利用の高い計画性が、阿仁銅山が30年にわたって持続できた要因であると論じている。

●マタギについて

■『秋田県文化財調査報告書第441集 秋田県指定有形民俗文化財阿仁マタギ用具文化財収録作成調査報告書』(秋田県教育委員会、2008)

平成17年度から19年度の3か年にわたって、秋田県教育委員会が行った県指定有形民俗文化財阿仁マタギ用具の調査の結果を報告書として刊行したもの。美の国あきたネット秋田県公式サイトにて「阿仁マタギ用具 調査報告書」

(<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/3381>)として公開されている。阿仁マタギの地域とされている根子、比立内、打当の3地区を対象にマタギに使われる道具の採集・実測が網羅的に行われている。各地区の集落や風俗の様子についても詳細な聞き取り調査が行われている。

■田口洋美「マタギ-日本列島における農業の拡大と狩猟の歩み-」(地学雑誌 2004 巻 113 号)

田口洋美は狩猟文化研究に著名な民俗学の研究者であり、同論ではマタギの生業形態の変遷を近世から現代まで、通史的に捉えようと試みられている。同論は阿仁マタギを対象を限定したものではないが、阿仁マタギはマタギの始祖と言われるため、多くの記述が見られる。

## 1-4.調査対象地域の概要

本項では阿仁川流域の地理・地形と概略史を理解するため、『阿仁町史』の内容を整理する。

### ●阿仁川流域の範囲

阿仁川は米代川水系の一級河川であり、米代川に注ぐ支流の中では流域面積、流路延長ともに最大である。その流域は現北秋田市（旧阿仁町・森吉町・合川町・鷹巣町）全域に渡っており、鷹巣盆地の西部で米代川に合流し、現能代市（旧ニツ井町・能代市）を通過して日本海に注ぐ。

### ●阿仁川流域の地形・地質

#### ・阿仁町

秋田県の中央山岳部、焼山火山郡の西に位置する休火山、森吉山の西麓と南麓に位置する。町全体の96%が急峻な山岳地帯である。町の中心部を貫流する阿仁川は、秋田県北秋田市南部の仙北市との境に位置する榎森に源を発した打当川が、北秋田市阿仁長畑で比立内川を合わせて阿仁川となり、北へ流れる。小又川、小阿仁川などの支流を合わせた後、鷹巣盆地の西部で本流の米代川に合流する。現在の阿仁比立内から阿仁前田までの阿仁川本流は、かつて、大又川と呼ばれていて、大又川が小又川と合流する阿仁前田から下流を阿仁川としていたが、昭和30年代に大又川が阿仁川に変更された。水系や地質の詳細については以下の図にて示す。

#### ・能代市

市域のほとんどは能代平野に属する平坦地だが、三種町との境付近や海岸部には丘陵がある。また、東部は米代川流域を除き山地が広がる。米代川河口左岸に市街地が形成され、日本海と市街地の間には広大な防風林（風の松原）が広がる。

### ●阿仁川・米代川流域の歴史

ここでは通史的にすべての歴史上の出来事を記述することはしないが、阿仁川・米代川流域の地域にとって特に重要と思われるもの、現地調査にてその名残が確認できる可能性が高いものについて記述する。また、関係する時代については【】内に示す。

#### ・【原始・古代】阿仁川流域の原始・古代

秋田県内は原始・古代の遺跡が多く見られ、阿仁川・米代川流域では縄文時代の遺跡として藤株遺跡（鷹巣町）、杉沢台遺跡（能代市）、上岱遺跡（水無）などがみられ、特に杉沢台遺跡は日本一大きな住居跡として有名である。この時代には他地域と同様に、狩猟採集によって生計を立てていたと考えられる。一方弥生時代の遺跡では、水田は未だ発見さ

れておらず、縄文時代の生活をそのまま引き継いだ縄文文化が形成されていたと考えられている。古墳時代から奈良時代には稲作の技術の向上などにより、平野部では定住する人々も増え、これらの人々は里人と呼ばれている。一方、山人と呼ばれる人々は野山を駆け巡り大型獣、小型獣、野草などの狩猟採集を行っており、この文化を残したのがマタギであると言われている。

#### ・【古代】蝦夷と大和朝廷の北方経営

蝦夷は大和政権が東北に勢力を伸ばしてくる以前に東北に住んでいた人々であり、柳田国男、喜田貞吉らなど多くの学者がアイヌ＝蝦夷説を唱えていたが、考古学的な調査から人種的には別とする説が現在は有力である。しかし、かつて蝦夷の生活圏であった場所には、未だアイヌ語地名が多く残っている場所もあり、アイヌ民族との文化的な繋がりは見られる。阿仁地域もその一つである。

『日本書紀』に斉明天皇四年（658）夏4月に、越国守阿倍比羅夫が180艘の水軍を率いて日本海を北上し、鰐田（あきた）、淳代（ぬしろ、後に野代、能代）、津軽まで遠征し、蝦夷を討ったという記録が残っている。これによって、秋田が初めて歴史上に登場する。この後、奈良時代、平安時代にかけては、大和朝廷が中央政権体制の整備の必要性から、地方の支配を強めるための蝦夷討伐が幾度となく行われた。坂上田村麻呂、文室綿麻呂により、800年代初頭には蝦夷の同化政策も進み、朝廷の北方経営が一段落した。

#### ・【中世】武士団の農村支配と「館」

鎌倉時代の頃になると、政権が朝廷から幕府による武士政権に移った。この頃は在地領主である武士が武士団を結成するとともに経営者として農村を支配する体制が取られていた。幕府成立後は領主である御家人が地頭職を任ずるのが一般的で、それぞれがその支配地に屋敷を建てたその屋敷を一般的に「館」といい、土塁を巡らせて城郭の役目を果たしていた。阿仁地方にも根子館や戸島内など、30カ所ほど館跡が史跡として残っている。

#### ・【中世】戦国時代の阿仁地方と秋田杉

15世紀頃、野代(能代)や湊(土崎)では、秋田氏が地の利を利用して、海運が盛んになった。移出品は米、スギ、大豆、鉛などの鉱山物、移入品が鉄、錨、綱などで、特にスギ材は畿内へと大量に送られるようになった。秋田杉は秋田氏の重要な財源であった。この時代には阿仁地域も阿仁川や小又川を運輸に利用して森吉山周辺のスギ材を産出していたものと考えられている。

#### ・【近世】佐竹藩下の阿仁鉱山の開発

阿仁はかなり古くから金、銀、銅のとれる鉱山であることが知られており、奈良時代には既に大仏建立のための青銅を都へ送ったとの文献が残っており、鎌倉時代には安東氏、戦

国時代には風張城（現在の阿仁吉田付近にあった）の城主であった松橋家が鉱山経営をしていたという記録も残っている。しかし、秋田全土に渡って本格的に鉱山開発が行われ始めたのは、佐竹義宣が関ヶ原の合戦後に出羽国に移封を命じられてからである。秋田における鉱山の開発は、そのほとんどが佐竹氏の入部後、慶弔七年（1602）以降に行われた。阿仁鉱山は佐竹氏の入部以前から開坑しており、阿仁銀山が正三年（1575）に湯口内付近の向山銀山の発見が最初であったとされる。佐竹入部後の慶長十九年（1614）には金1000両、銀2000貫の幕府献上の記録があり、その頃には今の銀山町が形成され始めた。承応元年（1652）からは江州出身の山師である青山清左衛門が経営にあたった。その後、阿仁銅山の発見は阿仁鉱山が全国的に有名になった契機である。発見年は寛文十年（1670）と寛永十四年（1637）の二説があり、発見者も高岡八右衛門といわれているが、定かではない。初め銅山が発見されたのは小沢であったが、小沢が発展するにつれ付近もつきず木と探査され、延享元年（1744）までには大沢、天狗平、真木沢、三枚、一ノ又、二ノ又、萱草と次々都開発され、大鉱山となった。鉱山の経営は初めは高岡八右衛門、八右衛門の死後に佐竹藩となっていたが、この頃には藩への運上は、全体の産出が一五〇万斤であるのに対し、たった九万斤程度に過ぎず、その多く利益は北国屋、大坂屋、泉屋（のちの住友）、鴻池などの関西資本の手にゆだねられていた。元禄年間にはほとんどその経営は北国屋、大坂屋が独占していたという。しかし、明和元年（1764）に阿仁銅山を幕府の直轄地とする命令を必死に撤回させているところからも、藩の重要な財源であったことは確かである。寛文年間（1661-72）以降に、戦国時代以来の金銀の攪乱によって金山銀山が衰退してからは、銅は貿易品としてより重要となっていった。

#### ・【近世】佐竹藩の財政と秋田杉

藩の財源として鉱山資源のほかには大きかったのが、秋田杉である。スギは米代川流域を中心に、秋田県内に広く分布していた。佐竹入部後、藩は御用山を指定し、許可なく用材となるような木々を伐採することを禁止した。この時期は久保田城や城下町の建設、新田開発に使う農業土木用材、鋼材の開発に伴う用材など、藩内の需要も多かったようである。

#### ・【近現代】明治時代の阿仁鉱山

明治時代に入り、明治八年（1875）には佐竹藩の直営から明治政府の直轄となり、工部省が運営するようになった。このため、新政府の高官であった井上馨や工部卿の伊藤博文なども銅山の視察に訪れている。また、鉱山技師としてメッケルら4人のドイツ人技師を雇い入れ、採鉱や冶金にも大改革を加えた。ドイツ人技師らの住宅として異人館が設けられ、本館は昭和二八年の火災に依って焼失してしまったが、阿仁鉱山外国人官舎及び事務所として使われていた方の建物は現存している。現存する異人館は現在は「北秋田市阿仁異人館」として国の重要文化財指定を受けており、一般公開されている。

阿仁銅山の改革は官営事業として多額の投資がなされたが、そのわりに成果が上げられなかったことから赤字経営となり、明治十八年（1885）には民間の古河鋳業に払い下げされた。官営事業に依る赤字経営を立て直すために、余剰人員の整理、鋳山の仕組みの近代化をはかるなど徹底した合理化の方針をとり、銅の生産額は急増し、明治三十一、二年頃には、年額二〇〇万斤に達した。それとともに鋳山の事業も機械化され、電動装置に依る掘削機械などが導入され、採掘方法も近代化されていった。そのために、文明の発展も著しく、明治三十年頃には電話が開通し、電灯もとり、山間部にありながら東北地方の中でも先駆的な地域となった。近年まで産出を続けたが、1987年、資源の枯渇により休山となった。

## 1-5.調査対象集落について

阿仁川流域沿いの打当(打当内)、戸鳥内、比立内、笑内、根子、粕内、阿仁合(湯口内)、惣内、米内沢の9集落を調査対象集落とする。根子以外はアイヌ語地名であり、いずれも単一大字以下の範囲でプロットが可能であった集落である。根子はアイヌ語地名ではないが、マタギの集落として著名であり、既往研究も豊富で、阿仁川流域を特徴付ける集落であると判断したため、調査対象集落とする。

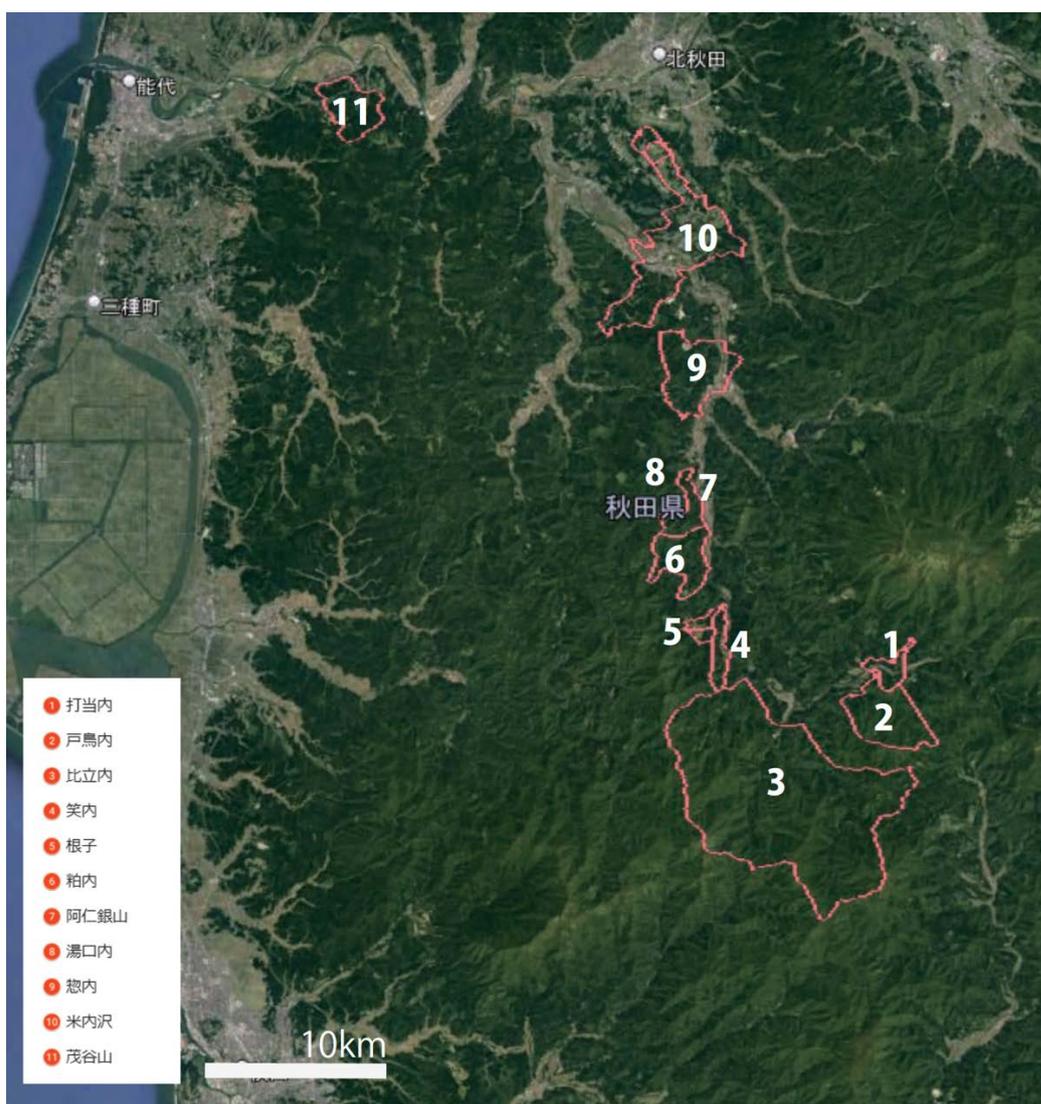


図 1 調査対象集落

## 1-6.調査行程の記録

9月2日	
7:00	朝食
8:30	調査に出発
9:00	<p>打当内・マタギの湯到着、資料館に見学</p> <p>フロントの齋藤英昭さんが阿仁マタギに詳しい方を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・打当内:鈴木英雄さん</li> <li>・比立内:松橋旅館さん</li> <li>・根子:山田博康さん</li> </ul> <p>田中康弘著「女猟師」を購入</p>
11:00	比立内・道の駅で昼食、その後集落と神社を巡って見た
13:30	根子・児童館に到着
13:45	山田博康さんと合流、ヒアリングを行う
15:00	山田さんの案内により、車で根子を見学
16:45	撤収
18:00	縄文の湯で夕食
19:30	旅館にて会議

9月3日(中谷班：中谷、齋藤、謝、鄭)	
7:30	朝食
8:15	調査に出発
9:30	<p>〈阿仁銀山町〉到着</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・伝承館…資料○、映像資料△</li> <li>・異人館…地下道で繋がっていた（積雪対策?）、変なコロニアル（ベランダがついたレンガ造）</li> </ul>
10:30	<p>川に沿った大通りを散策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・労働者のための商店街・駅・役所など近代的なもの</li> </ul> <p>【獲得資料】内陸線の時刻表、週間○○報、内陸線のパンフレット</p>
11:00	<p>阿仁合駅付属の食堂で昼食</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・駅前の案内板に簡略化された地図 …垂直性の集落構造、最下部の鉄道で人・物が運ばれる</li> </ul>
12:30	選鉱場跡に到着、車から降りて見学
13:30	<p>〈櫃内〉到着、車内から見学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・湧水・神社→垂直に水が流れ落ちる（これが阿仁川流域の</li> </ul>

	集落構造のベース)
13:40	<p>〈笑内〉到着、笑内駅前に駐車して散策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 駅ホームから電車を撮影</li> <li>・ 檀内と同じ集落構造を確認</li> </ul>
14:30	<p>〈戸島内〉到着</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 棚田 …根子に似たユートピア感</li> <li>・ 棚田と集落を繋ぐ山道を学生3人で散策 …山道にキノコの原木あり</li> </ul>

<b>9月3日(東野班：東野、ドルマ、山崎、吉田)</b>	
8:30	調査に出発
10:00	〈比立内〉到着、道の駅に駐車、松橋旅館でヒアリング
12:00	道の駅あにで昼食
12:30	からみ内の水源で取水口を見学
13:00	〈根子〉到着、昨日置き忘れていたドローンを回収、二又荘の前+トンネルの前でドローンを飛ばした
14:00	阿仁異人館を見学
15:00	阿仁合の山神社を見学 …大規模、高所、後から作った？
15:50	マタギ資料館で中谷班と合流
17:30	〈打当内〉で鈴木さんに聞き取り、大阪大学を卒業して地域おこし協力隊をやっている人も同席
19:15	縄文の湯で夕食
20:05	宿到着

## 1-7.本報告書の執筆分担

### 1.調査概要

- 1-1. 調査の目的 M1 吉田
- 1-2. 地域の選定理由 M2 東野
- 1-3. 先行研究 M2 東野
- 1-4. 地域の概要 M2 東野
- 1-5. 調査対象集落について M1 吉田
- 1-6. 調査行程の記録 M1 吉田

### 2. 本論・各集落について

- ・ 集落概要 M1 齋藤
- ・ 地質・地形・水利・自然災害 D2 華、M2 謝
- ・ 地域経営（産業・生業） M1 鄭（1. 打当内～5. 根子）、M2 謝（6. 粕内～

### 9. 米内沢)

- ・ 建築・集落構造 B5 二上
- ・ 信仰 B4 山崎

### 3. 考察

- 3-1. はじめに M1 吉田
- 3-2. 集落構造の変化 M2 東野
- 3-3. 地質・地形・水利・自然災害 D2 華、M2 謝
- 3-4. 地域経営（産業・生業） M1 鄭
- 3-5. 建築的特徴の変化 B5 二上

### 4. 結論

M2 東野

## 2. 本論・各集落について

2-1. 概要

2-2. 打当内

2-3. 戸鳥内

2-4. 比立内

2-5. 笑内

2-6. 根子

2-7. 粕内

2-8. 阿仁合

2-9. 惣内

2-10. 米内沢